日本福祉大学　原田正樹教授の講演は、ボランティアの原点論から今日的課題に至る、膨大な内容に及び、とてもその全容を文書として記録する事は叶いそうもない。

そこで、筆者が課題としている専門職としての市民活動という視点から、これを省みる。

生活困窮の「助けて」に応えるものが社会福祉であれば、「助けたい」に応えるものが、地域福祉であり、ボランティアセンターにはその仕組みを再構築し、社会資源を「つなぐ」役割が期待されている。

「金の切れ目が縁の切れ目」というが、現代社会は「縁の切れ目が金の切れ目」と換言すべく、孤立こそが困窮の根源となっている。人間は本来弱い存在であることを認め、誰もが相互に支え合いながら自立度を高めて行ける社会が目標となろう。

では「自立」とは何か？①身辺自立に始まり②経済自立そして③自分の生き方を自分で決めることのできる自立がある。社会福祉における自立観は変遷している。働くところと住むところを与えることだけで問題は解決しない。ハウスレスを克服するのではなく、ホームレスの解消が課題なのだ。一人ひとりが立派になって行くために、誰かがどのような支援をするかではなく、支える側も支えられる側も、お互いに支え合いながらスパイラルアップ（相互実現的自立）をめざすことが肝要で、そうした相互循環ができる地域社会（ケアリングコミュニティ）の仕組みを再構築して行こうではないか。

さて、我がふくてっくは既にボランティア活動の域を離れ、コミュニティサービス、或いはコミュニティビジネスにシフトしてきた。ただ、未だにボランティアとコミュニティサービスの概念整理が徹底されているとは言い難い。

ボランティアとは、本人の自発性・自主性が大切にされる行為であり、「ほっとけない、役に立ちたい」という気持ちの発露である。そこにおいては。「ボランティアをしない自由」も許容される。有償・無償の差は本質課題ではなく、有償ボランティアという概念の矛盾は既に周知のとおりである。それはボランティアではない。

一方、コミュニティサービスとは、社会の一員としての責務、義務をいい、そこには活動としてのノルマがあり、同時にそれは評価を伴うべき活動である。

以上のように規定して俯瞰すれば、当会各活動がボランティアとコミュニティサービスの間で、それぞれの特性を自分勝手に都合よく組み合わせて曖昧解釈しているに過ぎないことに気が付き、愕然とするほかない。

逆説的に言えば、その不完全性・混在性がゆえに長続きしてきたともいえる。すなわち、完全に燃焼することなく、従って燃え尽きることもなく、直言すれば、一線を超えて飛躍することもできずにいるのはそんな所以かと、見えてくるのである。

2015 年 6 月　中北　記